

沖縄県南城市サキタリ洞遺跡 (調査区II) 出土の シレナシジミに関する考古学的検討

山崎 真治¹⁾

An archaeological study on bivalve shells of *Geloina erosa* from Sakitari-do cave site,
Nanjo city, Okinawa prefecture.

Shinji Yamasaki¹⁾

1 はじめに

沖縄の先史遺跡からは、土器や石器とともに、さまざまな種類の貝殻を利用した多様な器具 (貝器) が出土する。しかし、入念な加工が施された特殊な装飾品等を除いて、一般に貝器の加工は簡便であり、人為的変形の程度も小さい。素材の原状をほとんど改変することなく利用される貝玉や貝匙、貝皿などはその代表例であり、現在でも多様な貝器が利用されているオセアニアの民族例においても、加工程度の軽微な貝器を数多く見出すことができる。

加えて、貝器の加工痕や使用痕は、考古学的コンテキストに入った後の損傷や風化によって容易に失われるため、貝器の認定はさらに困難を極めることになる。こうした条件下にあつて、加工・変形の軽微な貝器は、遺跡から出土する膨大な貝類資料に埋没している場合も少なくないのではないかとと思われる。しかし、こうした貝器類を抽出し、それらの文化史的意義を考察することは、沖縄における先史時代の人類誌を復元する上で重要な作業であると、筆者は考えている。

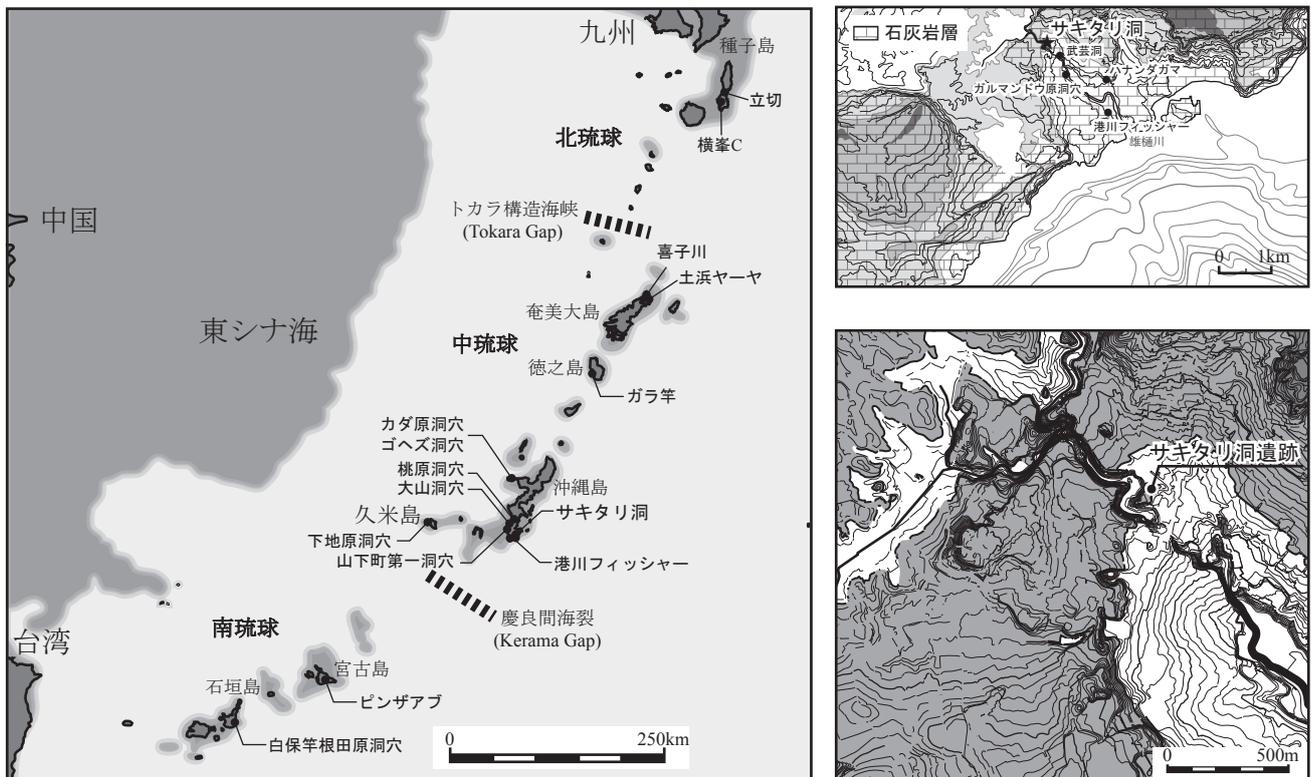


図1 サキタリ洞遺跡の位置

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

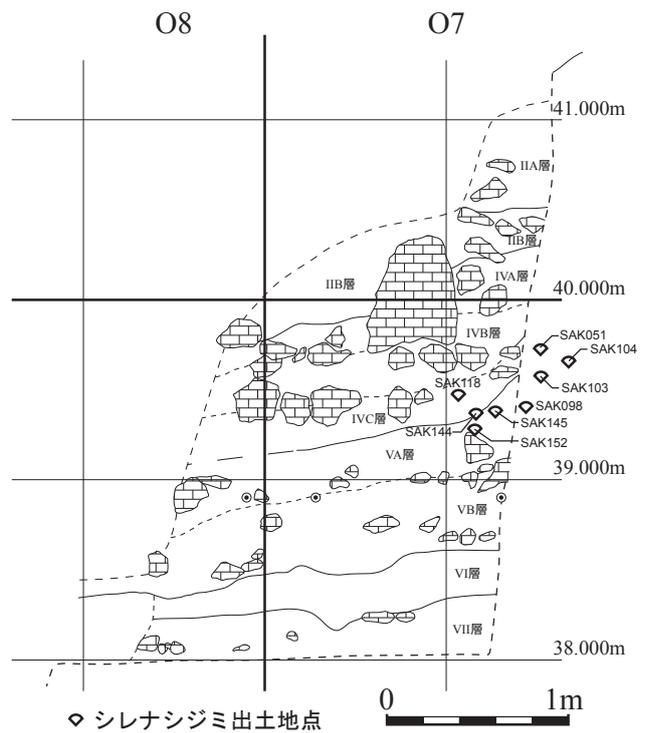
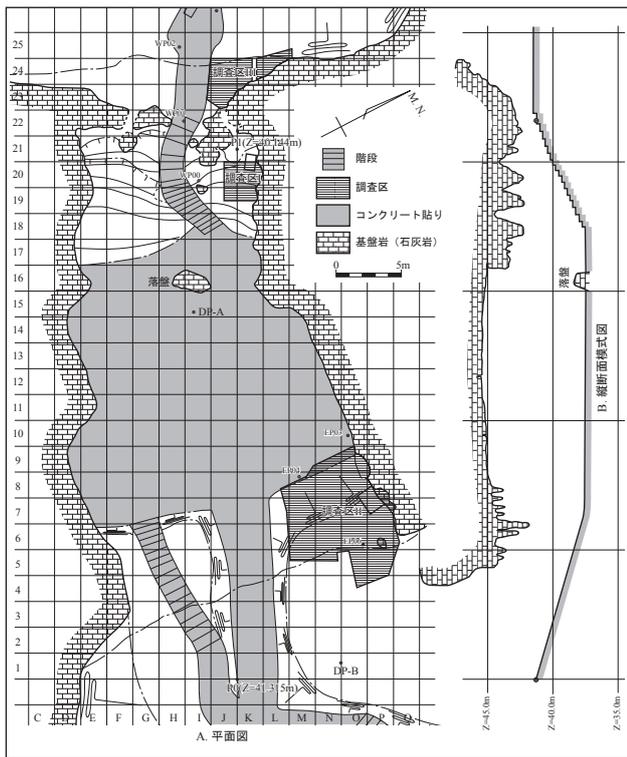


図2 サキタリ洞遺跡平面図(左)と調査区IIの地層断面図(右)

こうした観点から、筆者はこれまでに沖縄の先史時代における貝器類についていくつかの分析・報告を行ってきた(山崎2014、山崎ほか2014a・b、山崎ほか2015、山崎2016など)。本稿では、沖縄県南城市サキタリ洞遺跡(調査区II)から出土したシレナジミを対象として、その人為的加工・使用の可能性について考古学的検討を行う。

2 資料の産状と年代

サキタリ洞遺跡は、沖縄県南城市玉城字前川浮花原202他に所在する石灰岩洞穴内に形成された遺跡である(図1)。遺跡は、沖縄島南海岸に流出する雄樋川の左岸に位置し、標高は約40m、河口までの距離は約2kmをはかる。洞穴の総面積は約620㎡で、2009年より沖縄県立博物館・美術館による発掘調査が開始され、洞内外の3箇所(調査区I、調査区II、調査区III)で発掘調査が実施されている(沖縄県立博物館・美術館2014、2015、2016)(図2左)。

これまでの調査によって、サキタリ洞遺跡では後期旧石器時代から近代にかけての遺物が検出されている。本稿では、このうち東側洞口部に設定した調査区IIから出土したシレナジミ11点(図3、4)

表1 調査区II・IVB・IVC層の放射性炭素年代値

Lab. No.	試料名	層	試料の種類	$\delta^{13}C$ (‰)	^{14}C 年代値 (yrBP, 1 σ)
PLD-23427	SAK709	IVB層	炭化材	-27.20±0.18	3590±20
PLD-25009	SAK141	IVB層	イノシシ骨	-22.46±0.20	4850±20
MTC-16905	SAK152	IVC層	汽水貝(シレナジミ)	-6.0	4760±40
MTC-16907		IVC層	炭化材(イノシシ骨付着)	-28.7	4760±40
PLD-23297	SAK656	IVC層	汽水貝?(シレナジミ?)	-11.16±0.31	4825±25
PLD-23296	SAK144	IVC層	汽水貝(シレナジミ)	-4.47±0.37	5605±30
PLD-24999	SAK1022	IVC層	炭化材	-27.47±0.21	4585±20

を取り上げる。

調査区IIでは地表下約3mまで発掘を行い、層相の差異に基づいてI層～VII層まで7枚の堆積層を識別した。出土遺物から、I層は現代の造成土、II層は近代～グスク時代、IVA層は縄文時代晩期～弥生並行時代(仲原式～大堂原式)、IVC層は縄文時代前期(条痕文土器)、VB層は縄文時代早期相当(押引文土器)の堆積層と考えられる。また、放射性炭素年代測定の結果、IIB層からは10～12世紀、IVB層からは約5500～4000年前、IVC層からは約6500～5300年前、VB層からは9000～7000年前の年代値が得られている(沖縄県立博物館・美術館2015、2016)(図2右)。

本稿で取り上げるシレナジミは、調査区IIの

表2 サキタリ洞遺跡（調査区II）出土シレナシジミリスト

No.	地点	層	貝種	部位	分類	長さ (mm)	幅 (mm)	重さ (g)	加工
1	調査区II SAK098	IVB	シレナシジミ?	左	貝匙	76.2	58.5	24.0	研磨によって成形されたと考えられるが、風化のため加工痕認定困難。
2	調査区II SAK104	IVB	シレナシジミ	左	腹縁粗加工品	89.0	73.0	61.4	ノッチ状の加工痕
3	調査区II SAK103	IVB	シレナシジミ	右	腹縁粗加工品	66.8	71.3	37.1	鋸歯状の加工痕
4	調査区II 07	IVC	シレナシジミ	左	腹縁粗加工品	66.3	68.0	40.9	鋸歯状の加工痕
5	調査区II N7	—	シレナシジミ	左	腹縁粗加工品	68.0	73.5	52.1	鋸歯状の加工痕
6	調査区II N8	I	シレナシジミ	左	腹縁粗加工品?	57.9	61.5	26.8	成長線に沿った割れ
7	調査区II SAK152	IVC	シレナシジミ	右	腹縁粗加工品	49.2	56.4	16.7	年代測定試料(MTC-16905) 成長線に沿った割れ 鋸歯状の加工痕
8	調査区II SAK051	IVA	シレナシジミ	左	腹縁粗加工品	45.1	62.7	14.2	鋸歯状の加工痕
9	調査区II SAK144	IVC	シレナシジミ	右	腹縁粗加工品	40.0	54.3	12.4	年代測定試料(PLD-23296) 鋸歯状の加工痕
10	調査区II N7	IV下部	シレナシジミ	左	腹縁粗加工品	42.5	59.2	22.4	鋸歯状の加工痕
11	調査区II SAK118	IVB	シレナシジミ	左	腹縁粗加工品	45.9	43.9	16.5	ノッチ状の加工痕

IVB・IVC層を中心に出土した。IVB・IVC層からは、このほかに100点を越える条痕文土器片とともに、獣骨（イノシシ、イヌ）、魚骨、貝類（シャコガイ、マガキガイ等）、装飾品（マルツノガイ類）、そして少量の打製石器（チャート、緑色岩）等が集中的に出土した。したがって、シレナシジミの多くは条痕文土器に伴うものと考えられる（註1）。このうち2例（SAK152（MTC-16905）、SAK144（PLD-23296））について年代測定を実施したところ、その結果は6000～4900年前というものであった。現在までにIVB・IVC層について得られている年代値を表1に示す。

3 資料の特徴

出土したシレナシジミの実測図と写真を図3～4に示し、リストを表2に示す。

図3-1はいわゆる貝匙と考えられるもの。表面

は平滑で、研磨によって成形されたと考えられるが、風化のため表面の研磨痕等は確認できない。

図3-2～11に示した標本の多くには、縁辺にノッチ状または鋸歯状の破断面が見られる（図3点線部分）。シレナシジミの貝殻は成長線に沿って割れやすいが、出土品に見られるノッチ状、鋸歯状の破断面は、人為的な加工によって生じたものと推定される。筆者はこれらの資料を『概要報告Ⅲ』（沖縄県立博物館・美術館2016）において報告し、「いわゆる貝刃ほど定型的なものではないが、上記のノッチ状、鋸歯状の破断面をもつシレナシジミ粗加工品も、何らかの利器として利用されたと考えられることを述べた（前掲：37頁）。しかし、シレナシジミの人為的加工については、概要報告において言及した利器としての利用以外にも、軟体部を取り出す際の打ち割りや、埋没過程での破損についても検討しておく必要があると考える。

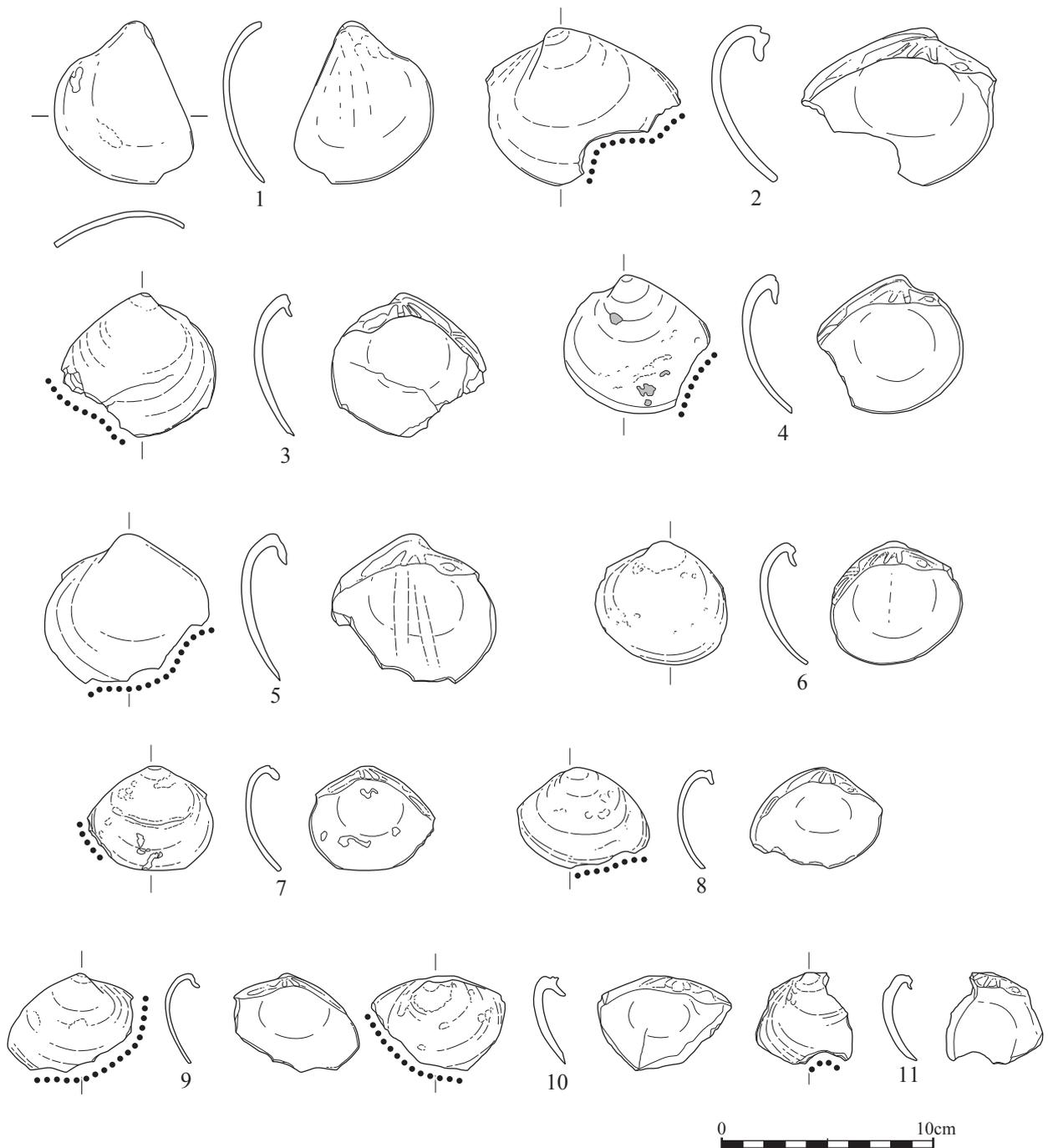


図3 サキタリ洞遺跡平面図（調査区Ⅱ）出土のシレナシジミ（点線部分は打ち欠きによる加工痕を示す）

そこで、本稿ではシレナシジミの人為的加工に関する若干の実験と観察を通して、主に考古学的観点からサキタリ洞遺跡出土のシレナシジミの性格について議論することにしたい。

4 生貝の打ち割り実験

軟体部を取り出す際の打ち割りによってどのような痕跡が残されるかを調べるために、非加熱のシレナシジミ生貝10点について打ち割り実験を行った。打ち割りの方法は、直接打撃（対象物を片手に保持し、もう片方の手に保持したハンマーで打撃を加える方法）と台石打法（対象物を台石上に固定して、ハンマーで打撃を加える方法）を用いてそれぞれ

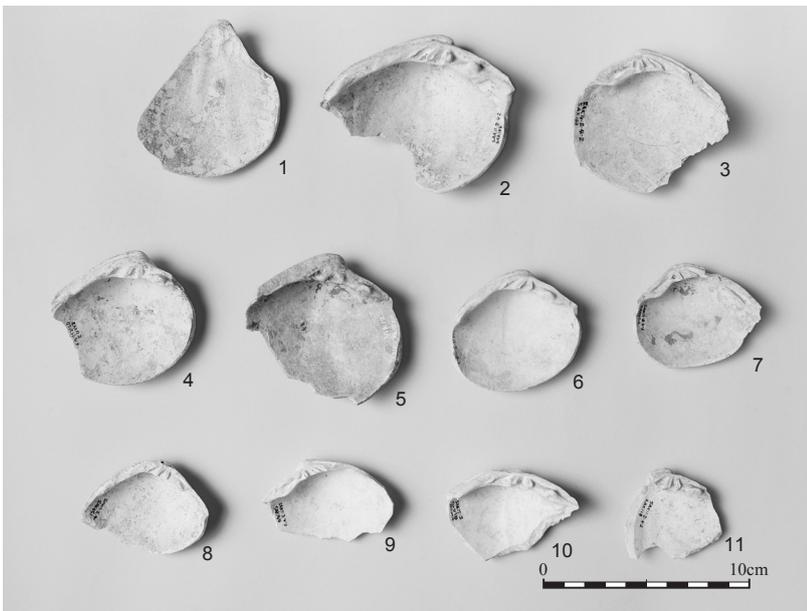
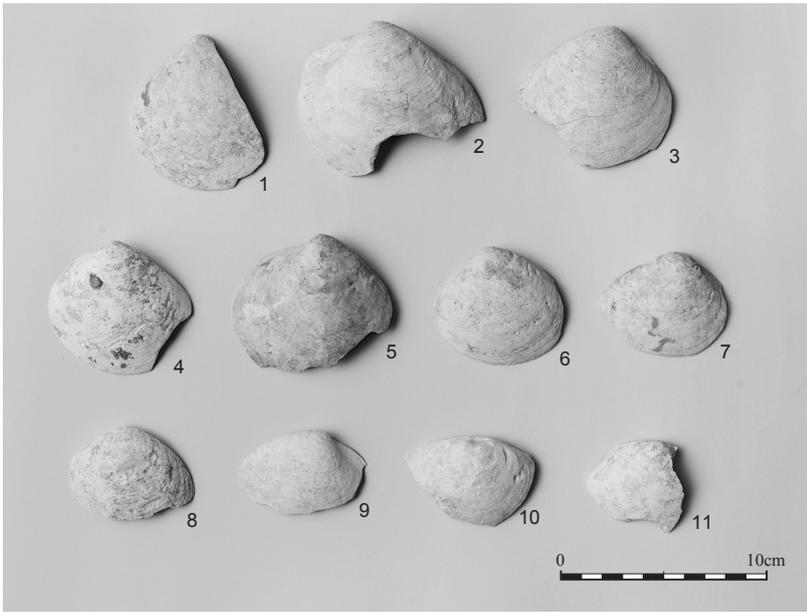


図4 サキタリ洞遺跡平面図（調査区Ⅱ）出土のシレナシジミ写真
（上：外面、下：内面）

れ5点ずつ実験を行い、打ち割り後の貝殻について観察を行った（図6）。

実験資料の写真を図7、8に示す。直接打撃によるものが資料A～E、台石打法によるものが資料F～Iである。第一に注目されるのは、すべての例において打撃によって割れたのは一方の殻のみであったという点である。すなわち、生貝を打ち割った場合、50%程度の比率で完形の貝殻が得られることになるはずである。また、直接打撃と台石打法で割れ方に大きな違いはないが、台石打法では必然的に打点の位置が限定されることになる。今回の実験では、咬合面を水平に設置したため、打点が貝殻の膨隆部に位置することになったが、台石上での貝の設置方法によって打点の位置も変化するはずである。このほか、台石打法ではハンマー側ではなく、台石側に穿孔が生じた例も認められた。

打ち割り後の貝殻に見られる破碎の基本的な傾向として、シレナシジミの生貝に外側から打撃を加えると、打点直下に穿孔が生じ、穿孔周囲は著しく破碎して、多数の細かな破片を生じる。さらにこの穿孔を基点として、放射状に複数の方向に向かって割れが広がっていく。特に貝殻の成長線方向に延びる割れは、成長線に沿ってスムーズな破断面を形成する傾向がある（註2）。



図5 シレナシジミの加工状況（左：No.3、中：No.11、右：No.11内面）

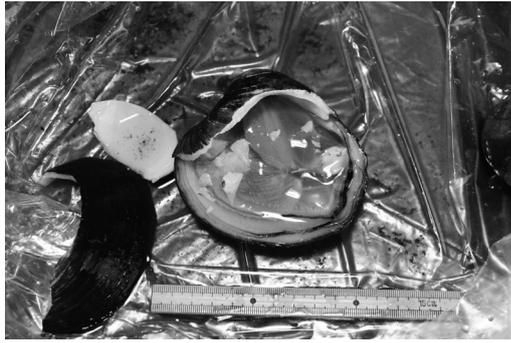


図6 生貝打ち割り実験の様子

5 連続的な打ち欠き加工実験

サキタリ洞遺跡出土品とは異なるが、シレナジミの腹縁部に連続的に打ち欠きを加えた、いわゆる貝刃がいくつかの遺跡から出土している（例えば山崎ほか2014）。今回、こうした貝刃についても合わせて製作実験を行ってみた。打ち欠きの方法は、直接打撃と台石打法を用いてそれぞれ5点ずつ実験を行った。なお、実験にあたっては非加熱の貝殻を使用した（図9・10）。

その結果、直接打撃では打ち欠きのコントロールが悪く、割れのサイズや配置が不規則になりがちであるが、台石技法では比較的整然とした加工を行う

ことができた。また、直接打撃では、成長線に沿って破断する場合があった。以上のことから、貝刃製作にあたって適正な刃部を得るためには、直接打撃よりも台石技法の方が効果的であることがわかった。

なお、今回の実験には非加熱の貝殻を使用した。加熱した貝殻は強度が脆くなることが予想されるので（註3）、今後、加熱した貝殻についても同様の実験を行ってみたい。

6 埋没過程での破損

シレナジミの埋没過程での破損については、Harrisら（2015）による検討がある。そこで示された踏みつけ実験による破損状態は、サキタリ洞遺跡出土品とは異なり、成長線に沿って割れたものが主体を占めるようである。

なお、埋没過程での破損というわけではないが、サキタリ洞遺跡出土品は風化によるチョーク化が顕著で、使用痕等を含めた表面の観察は困難であった。今後、条件の良い出土品の蓄積を待って、使用痕等についても検討を加えたいと考えている。

7 議論

以下では、上記の実験的検討を踏まえて、サキタ

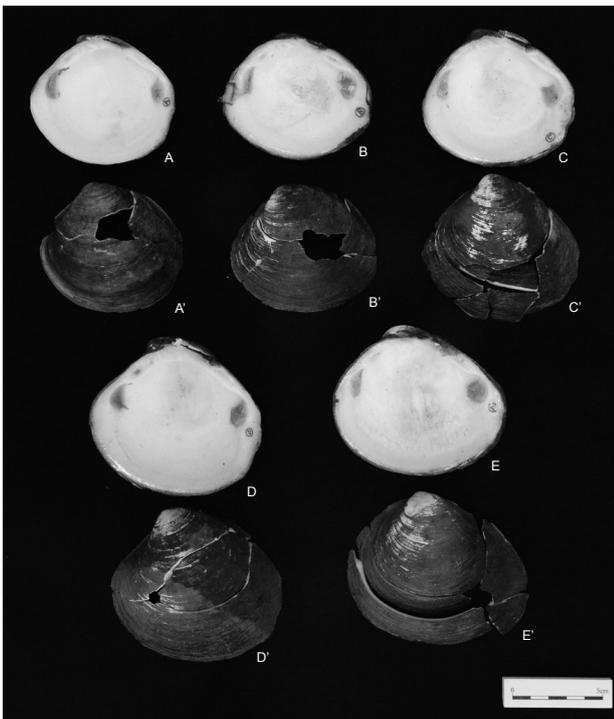


図7 生貝打ち割り実験（直接打撃）

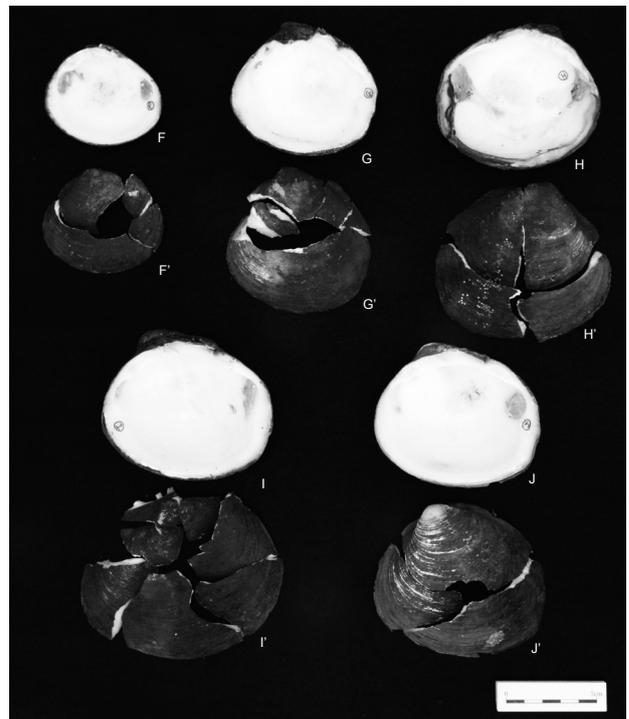


図8 生貝打ち割り実験（台石打法）

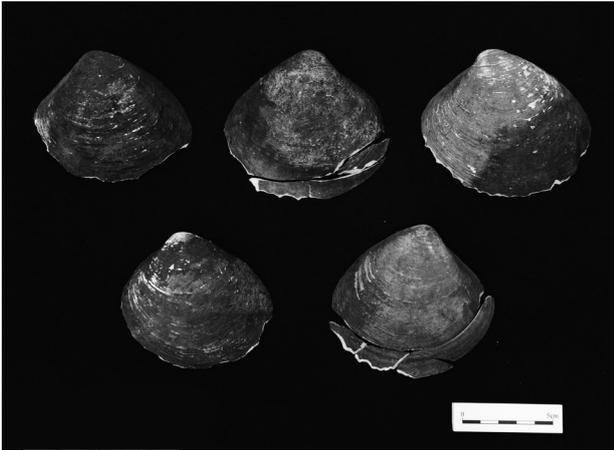


図9 貝刃製作実験（直接打撃）

リ洞遺跡出土のシレナシジミの性格について考察する。

まず、軟体部を取り出す際の打ち割りの可能性については、出土品に見られる打点の位置が、いずれもかなり腹縁寄りに位置すること、また破損品が主体を占めることから、積極的に支持することは難しい。また、伴出土器から想定される年代よりもかなり古い貝殻（No. 9：SAK144）が含まれていることも、食用としての生貝の利用というよりも、利器としての貝殻の利用を支持するデータと言えよう。

こうした問題を議論する上で、打撃の加えられた方向（外面側からの打撃なのか内面側からの打撃なのか）を判定することは非常に重要であるが、サキタリ洞出土品は表面の保存状態が悪く検討が難しい。No. 3やNo. 11の割れ口は、内面側から外面側に向かって広がっており、内面側からの打撃によるものではないかと思われる（図5）。

ところで、サキタリ洞遺跡出土品は、主に縄文時代後期以降に見られるシレナシジミ製貝刃（たとえば山崎ほか2014b）とは加工の状態が異なっており、異なる文化的コンテクストを背景として製作された別種の貝器と考えられる。貝刃よりもいっそう expedient tool としての性格の強い器具と思われるが、今回は使用痕等について具体的に検討を行うことはできなかった。今後、類例の蓄積を待ってさらなる検討を行っていきたいと考えている。

以上のことから、サキタリ洞遺跡出土のシレナシジミは、利器として使用するために人為的に加工された貝器であると推定することができる。具体的な

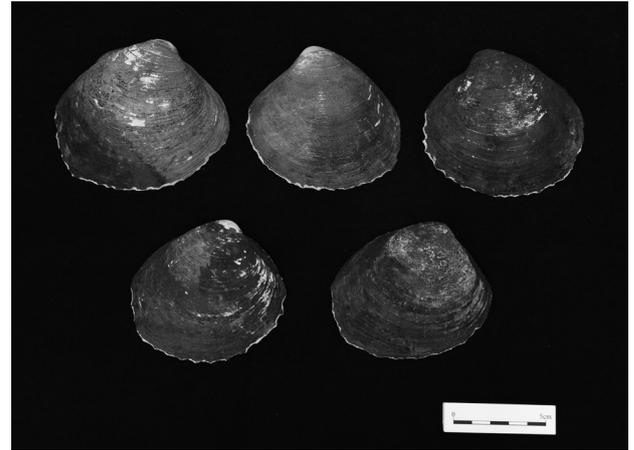


図10 貝刃製作実験（台石打法）

用途は不明だが、打ち欠きの施された腹縁部が機能部、すなわち刃部にあたるものと考えられ、切削具としての用途が想定される。いわゆる貝刃とは異なるタイプの貝器であることから、当面は「シレナシジミ腹縁粗加工品」のような名称で呼ぶのが適切ではないかと考えるが、用途や使用痕の問題を含め、今後のさらなる研究の深化を期待したい。

本稿をまとめるにあたり、貝類の同定については黒住耐二氏（千葉県立中央博物館）のご教示を得た。また、上原沙也加氏には資料の写真撮影についてご協力いただいた。末筆ながら記して謝意を表します。

註

註1 筆者は、サキタリ洞遺跡の調査区IIから出土した条痕文土器は、九州の轟C・D式に年代的に並行し、縄文時代前期末に位置づけられるものと考えている（山崎 投稿中）。

註2 サキタリ洞遺跡出土品では、破断面が主に成長線に沿って形成されたものも見られるが（No. 6）、同様の特徴をもつものは、実験資料中にも見られる（E）。

註3 ハマグリを使用した実験によれば、加熱品では非加熱品に比較して打撃の際に成長線に沿って割れやすく、刃部を作出することが困難であった。仮に刃部を作出できたとしても、激しい使用には耐えられないと思われる。したがって、貝刃として利用された貝殻は、非加熱品が主体ではなかったかと思われる。

文献

- 沖縄県立博物館・美術館 2014『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告書Ⅰ』
- 沖縄県立博物館・美術館 2015『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告書Ⅱ』
- 沖縄県立博物館・美術館 2016『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告書Ⅲ』
- 山崎真治 2014「ヤブチ式土器と貝器文化」『考古学研究』第61巻第1号 考古学研究会 17-31頁
- 山崎真治・藤田祐樹・片桐千亜紀・黒住耐二・海部陽介 2014a「沖縄県南城市サキタリ洞遺跡出土の後期更新世の海産貝類と人類との関わり」『Anthropological Science (Japanese Series)』122(1)：9-27頁
- 山崎真治・黒住耐二・大城秀子 2014b「沖縄県南城市熱田原貝塚出土貝刃の製作技術」『日本考古学』38：33-46頁
- 山崎真治・黒住耐二・佐野勝宏・片桐千亜紀・藤田祐樹 2015「旧石器時代の貝製ビーズー沖縄県南城市サキタリ洞遺跡からの報告」『旧石器研究』11：97-105頁
- 山崎真治 2016「サキタリ洞遺跡出土の旧石器時代の貝器とその特質」『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告書Ⅲ』89-108頁
- 山崎真治 投稿中「沖縄・奄美の曾畑式土器をめぐる諸問題」『南島考古』36
- Harris, M., Faulkner, P., Asmussen, B. (2015) Macroscopic approaches to the identification of expedient bivalve tools: A case study investigating *Polymesoda* (= *Geloina*) *coaxans* (Bivalvia: Corbiculidae) shell valves from Princess Charlotte Bay, Queensland, Australia. *Quaternary International* XXX: 1-15.